おわりに

３年にわたる調査の結果、八幡沖遺跡は中世の城館跡、縄文時代の狩猟場であったことがわかりました。

城館を構成する主体となる主郭（しゅかく）やこれに伴う建物跡等は、残念ながら今回の調査区内では確認されませんでしたが、大規模な堀跡などの位置関係から推察すると、街道に面した北側にあった可能性が考えられます。現在の地形は、当時から大きく改変されているようで、昭和30年代の付近の航空写真からは、北側に舌状に張り出す尾根の形がうかがえます。現在の診療所や孝養ハイツ付近に主体があったのかもしれません。このような点から、今回の調査区は城館の背面部分の一部であったものと考えられます。

室根町には数多くの城館跡が確認されていますが、いずれも史料に乏しく、八幡沖遺跡に至っては、現在まで城館跡として認知されていませんでした。城主も不明な城館が多いですが、地域的にはこの一帯を治めていた「葛西氏（かさいし）」配下の一派と想定されます。八幡沖遺跡から街道（現在の国道284号線）を挟んだ向かいには、周知の下折壁城（しもおりかべじょう）（金鶏城（きんけいじょう））が存在しています。不明な点が多いものの、「仙台領古城書上」に城名が見られ、城主名として「千葉遠江」と記されており、下折壁千葉氏の居城であったようです。永禄（えいろく）11年（1568年）に下折壁城主千葉茂成と曽慶（そげい）（大東町）城主岩淵信時との間で争乱が起きます。どちらも葛西氏配下の家臣同士ですが、周辺は一時緊張状態にあったことがうかがえます。この諍（いさか）いは太守である葛西氏の介入によって収まりますが、同支族内での小競り合いは頻繁に起こっていたようです。街道を挟んだ真向いに位置するという地理的な状況からも、八幡沖遺跡の城館は、この下折壁千葉氏に関連するものと推測できるのではないでしょうか。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元住民のみなさま、並びに日々の作業にご尽力いただいております作業員のみなさまに感謝を申し上げます。

▲二重に巡る堀跡

〔平成28年度 調査要項〕
所在地：一関市室根町折壁字向山・八幡沖地内　　委託機関：岩手県県南広域振興局土木部一関土木センター
調査原因：地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス　　調査期間：平成28年6月1日～8月3日（予定）
調査対象面積：1,450㎡　　調査機関：（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
調査担当者：小林弘卓・米田寛・鈴木貞行・久保友咲

©（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2016

一関市室根町 八幡沖遺跡（はちまんおきいせき） 現地公開資料

平成28年７月24日（日）

今回の発掘調査は、地域連携道路（室根バイパス）整備事業に伴い、消滅する遺跡の記録保存を目的に行っている緊急発掘調査です。

ここ八幡沖遺跡は、向山･八幡沖に広がる遺跡で、平成26年から３ヵ年にわたり調査を行った結果、大規模な堀跡や険峻な自然地形を利用した中世の城館跡であったことが明らかとなりました。また、尾根の高い部分には動物を捕えるための陥し穴が数多く見つかっており、縄文時代には狩猟場として利用されていたようです。

今日まで繋がる室根の歴史の一部を垣間見ていただき、先人たちの文化に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

はじめに

八幡沖遺跡は一関市室根町折壁字向山・八幡沖地内に所在します。平成26年度から調査を開始し、全体で14,873㎡を対象に行いました。３年目となる今年度は、この中央部分にあたる1,450㎡を調査しています。標高は175～190mで、一番高い尾根上に立つと、北側正面に雄大な室根山がそびえ、眼下には東西に走る気仙沼街道や大川が一望できます。

３ヵ年にわたる調査では、中世の堀跡３条、犬走（いぬばし）り２か所、墓壙（ぼこう）１基、縄文時代の陥（おと）し穴35基が見つかりました。このほか時期は不明ですが、土坑（どこう）14基や溝跡７条などがあります。遺物は非常に少量ですが、近世陶磁器（とうじき）片や中世銭貨（せんか）などが出土しました。（７/20日現在）

中世城館施設 ー 郭・堀跡・切岸

今回の調査では、中世城館を構成する施設の一端が垣間見られました。

調査区内には２つの尾根が存在しますが、これらは堀によって分断されているようです。これらは郭（くるわ）と考えられ、城主の居城する建物や関連施設等があったものと考えられますが、残念ながら今回の調査ではその痕跡については見つかりませんでした。

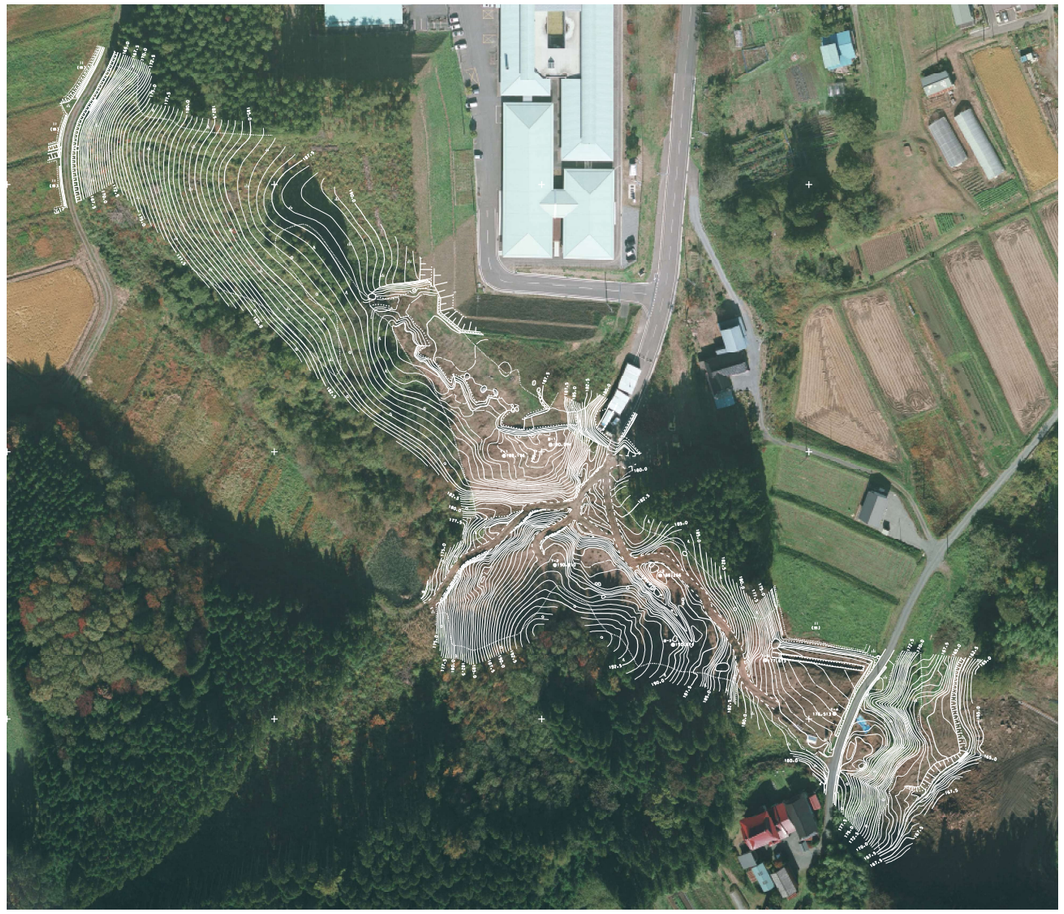
▲堀跡の断面状況

２つの郭の間には、それぞれ深い堀が掘られており、二重堀の様相を呈しています。いずれも郭同士が近接する部分から始まり、郭沿いに南方に向かって行くようです。両者を合わせた上幅は25～28m、深さは現表面から５m、尾根上からは13mにも及びます。切岸（きりぎし）は斜面を削って傾斜をきつくしており、堀と組み合わせて防御性効果を高くしているようです。切岸の長さは15m前後、斜度は30～40度です。

▲切岸での作業風景 - 現代でも作業は困難

これらの普請（ふしん）は、南側、つまり街道と面する正面ではなく、背後からの敵の侵入に備えた防御施設であったものと想定されます。

▼上空から見た八幡沖遺跡と地形線図（平成26年調査時）



縄文時代の陥し穴

八幡沖遺跡からは、中世の城館に関するもの以外にも、多くの遺構が見つかっています。その中でも､最も多かった縄文時代の陥し穴について紹介します。

尾根の高い部分でまとまって見つかっており、細長い溝状のものや、楕円（だえん）形のものなどがありました。楕円形のものが多く、大きさは1.6×１m、深さは1.2mほどです。表面を草や枝などで覆い隠し、動物を捕える罠として使用したものと思われます。並んで密集することから、当時の縄文人が獣道（けものみち）などに計画的に配置していたようです。

▲陥し穴 - 中央に杭痕がある